



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 2002, 0204s: 1223-1230

ISSUE DATE:

2002-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196539>

RIGHT:



京大広報

号外

2002. 4

目次

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば.....1224

修士学位授与式における総長のことば.....1226

博士学位授与式における総長のことば.....1228

大学の動き

平成13年度卒業式.....1229

平成13年度修士学位授与式.....1230

博士学位授与式.....1230

医療技術短期大学部の動き

平成13年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式.....1230



平成13年度卒業式



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成14年3月26日

総長 長 尾 真

今日京都大学を卒業される2,834名の皆さん、まことにおめでとうございます。元総長沢田先生ならびに名誉教授の方々のご列席のもとに、各学部長とともに皆さんの門出をお祝いできることは、私の最大の喜びであります。卒業式にご参列下さいました皆さんのご家族、関係者の方々にも心からお慶びを申し上げます。

皆さんは小学校以来今日まで、16年間以上にわたって教育を受けて来たわけですが、今日の卒業式にのぞんで、京都大学での学生生活をどのようにふり返っているのでしょうか。皆さんはどれだけのことを学び、どれだけのことが身についたものとなっているのでしょうか。どのような楽しいこと、苦しいこと、悲しいことがあったのでしょうか。

そういった事を通じて、自分は人格的にどのように成長し、社会に出てゆこうとしているのかをよく考えてみていただきたいのであります。諸君は法律上も社会的にも、もう立派な大人と認められているわけですが、ほんとうに一人の独立した社会人として、自分でよく判断し正しく行動する自信をもっているのでしょうか。

皆さんは今日から社会人としての第一歩をふみ出すのであります。もちろん、まだまだ未熟であるわけですが、京都大学で得た知識、訓練した人格の力に支えられた勇気と自信をもって、皆さんを待ちかまえている未知の世界に出てゆかねばなりません。

今日の世界、特に日本社会は大きな激変期に入ってきております。おそらく敗戦以後の最大の社会的変革の時期を迎えていると言っても間違いありません。失業者が増え、また皆さんのような若い人達でさえ就職できない人が増加しています。デフレ経済で企業はどんどんと倒産してゆくという状況であり、何が起ころうとも不思議でないといった様相を呈していることは皆さんも十分認識していることであります。国際的に見ても、貧困から脱出できない国や飢饉にあえぐ人達が膨大に存在し、宗教的対立もからんで、世界各地で民族紛争が起これるといった状況であります。

一方では、目ざましい科学技術の進歩があります。世界中がインターネットを介して即時につながり、またクローン動物が出来たり臓器移植が行われると



いった、以前には考えられなかったようなことが実現されつつあります。しかし他方ではこの大きな地球がどんどんと汚染され、環境破壊されつつあるという事実もあるのであります。

このように今日地球上では、目をおおうばかりの悲慘から、現代文明を支える人間知識の輝かしい成果といったことまで、あらゆる事が起こっております。このような状況を我々は一人の人間としてどのようにとらえ、どのように理解すればよいのでしょうか。

我々は、人類の英知は無限に発展し、輝かしい未来があるのだという進歩の概念によってこれまで来たわけですが、これからは決してそうではないということがはっきりして来ました。まさに価値観の転換期を迎えているということでもあります。どのような価値観に変わって行くのかは、皆さんがそれぞれによく考えねばならないことであります。これからの複雑で激動する社会に入っていく皆さんは、よほどしっかりした人生観、物の見方をもっていなければ、目先のことに翻弄され、自分のやるべき事が見えなくなり、自分の人生を見失ってしまうことになりかねません。

ただ、自分の物の考え方、あるいは人生観といったものも固定されたものではなく、人生経験によって変化し成長してゆくものでありましよう。その成長が健全なものであり、立派な人格を身につけることになる基礎は、皆さんが大学で学んだ学問であり、青春時代のいろんな経験から形成した倫理観、道徳観であります。皆さんはこの大学時代に得た様々な事を生涯大切にし、これに磨きをかけていってもら

いたいのであります。

京都大学の創立者、第一代総長の木下廣次先生は「自重自敬を旨として自立独立を期す」と言っておられます。これは「自由の学風」という概念とともに京都大学の理念となっていますが、自分が自分の責任において事にあたってゆくという意味が込められていると考えられます。皆さんはこの困難な世界に出てゆくにあって、この「自重自敬」という言葉をよくかみしめ、ことあるごとにこの言葉を思い出していただきたいと存じます。「政治が悪い、社会が悪い、会社の上司が悪い」などと言って、他人に責任を押しつけていても、何も良くなることはありません。どうすれば良くなるか、自分の力で出来ることは何かを考え、時間がかかっても忍耐強くやってゆくことが必要であります。

21世紀の京都大学の努力すべき目標として昨年末に定めた京都大学の基本理念の中で、

「教養が豊かで人間性が高く、責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する」

と述べています。これからは他人や他の生物・無生物を犠牲にして科学技術を無理矢理に押し進めたり、自分の企業だけが競争に勝つために手段を選ばないといった過度の競争、他を犠牲にした独善的な発展といったことは否定されるべきであり、あらゆるものとの調和ある共存を目ざすべきであります。

「共存」という言葉は「共生」という言葉と置き換えてもよいでしょう。この「共生」は生態学において「寄生」に対する対概念として定義されているものであり、そこには対等の立場での存在という意味が込められているのであります。京都大学の基本理念における「共存」には、当然その意味が込められております。多民族・多文化の共存、先進国と途上国との共存など、社会学、政治学の世界はもちろんのこと、さらに広く動物の生存の権利や自然環境そのものの存在の権利、あるいはその存在の価値の尊重といったことまでも含んでいると解すべきであります。

特に我々現代の人間が将来世代の人々のことを考えずに地球資源を消費しつくしてしまうといったことは、現代世代と将来世代との利害衝突と考えることが出来るでしょう。このような場合は、一方は権利主張を出来るが、他方は権利主張する主体が現時点で存在しないという場合であります。さらに人間以外の生物・無生物は権利主張する手段を持たぬ主

体であります。権利という概念は意志のあるところのみに存在するという古典的な定義や解釈を越えて、権利主体をもっと広くとらえることが必要であり、また今日の権利概念はそのような方向に行きつつあると考えられます。これは新しい価値観の時代に入ってきていることを示しており、京都大学の基本理念はそういったところに作られているのであります。

森羅万象との共生、共存という概念は、東洋において古くから存在したものであります。人間、あるいは自己は宇宙・自然の中の一員であり、自分は他の全てのものと同列にあるという考え方であります。自分が大切な存在であれば、自分の隣にいる人達、自分をとりまく事物もまた全て同じく大切なものであり、自己に魂があるとすれば、他の全ての存在にも靈魂が宿っていると観る見方であります。日本古来の思想はその色彩が特に強く、自然と人間との共生、共存ということが何らの不自然さもなく今日にまで引き継がれて来ております。

こういった全てのものの共存の概念の社会において、我々はこれまでのようにほとんど無制限な権利や自由を主張し、またそれを享受することはできません。地球世界の全てのものが共生・共存してゆくためには、全てのものが自分のエゴを押さえ、それぞれが他者の立場に立ち、一定の犠牲をはらい、忍耐することが必要であります。

我々は今日、このような考え方、すなわち人間が地球上の他の生物、また無生物とも適切な形で共存してゆくという覚悟をしなければ、21世紀の社会が直面しているエネルギー問題や地球環境問題を始めとする数多くの深刻な問題の真の意味での解決を得ることは困難でしょう。

したがって、これから益々グローバル化されてゆく国際社会において、我々はこの日本古来の精神に立ち帰って、これを世界の人達に広めてゆく努力をする必要があると考えます。全てが競争であり、全てが金銭的価値で計られるという今日の社会を変革し、京都大学の基本理念が述べている「調和ある共存」という新しい価値観が広く受け入れられる社会に向って、我々は力を尽くしてゆかねばなりません。

今日卒業される皆さんはこういったことをよく考え、皆さんのこれからの幸い多い人生を通じて全てのものの調和ある共存に向って努力して行っていただくことを期待し、私のお祝いの言葉といたします。

修士学位授与式における総長のことば

平成14年 3月25日

総長 長 尾 真

今日、京都大学修士の学位を得られた1,918名の皆さん、まことにめでとうございます。ご列席の名誉教授、各研究科長の皆さんとともに心からお慶び致します。

ところで、皆さんにとって修士課程の2年間はどのような意味をもっていたでしょうか。修士課程修了のこの時にあたって、自分を振り返るということは非常に大切なことであります。自分の修士課程での学問研究とともに、もっと広い意味における自分というものを見つめなおすことが必要であります。人間として自分はどのように成長したのだろうかという問いであります。

学部は基礎教育、教養教育に主眼をおいたものであるのに対して、大学院修士課程は、それぞれの専門分野の知識を深く学びとり、その分野の専門家として社会から認知される人材となる教育をすることにあるとされています。しかし単に専門的知識を身につけるというだけでなく、専門的知識をもつ人の持つべき当然の責任も負わねばなりません。すなわち、いろんな局面において正しい適切な判断を行い、そのように発言し、また行動ができるようであればなりません。こういったことは、真理を探究する諸君の研究を通じて、自分の人格の総体において獲得したと思いますが、これを修士修了に際して、それぞれが自身に問うていただきたいのであります。

皆さんが過ごした修士課程の2年間に、社会ではいろんなことが起こりました。社会はまさに激変しております。特に日本においてはバブルがはじけて以来、経済はますます低迷し、企業は倒産し、失業者がどんどん増えるという厳しさであります。これまでの日本の多くの分野で行われて来た護送船団方式は完全に崩壊し、グローバル社会の中での激しい競争時代に突入しました。

また1989年にソ連が崩壊し、民主主義・資本主義が勝利したといわれ、その後は米国を中心として極端な金もうけ主義の時代に入ってきております。そして今日では日本においても企業間競争だけでなく、あらゆる所に競争的環境を導入し、構造改革を行い、

強者が勝つという論理を貫徹しようといった状況になって来ています。これは裏返していえば、弱者は敗北し、没落してゆくことを意味しており、社会全体が勝者と敗者という二極分化の様相を呈することになる危険性があるわけであります。

しかし、そのような弱肉強食の世の中でよいはずはありません。お互いに分ち合うという考え方が必要であります。そのようなロマンティックな考え方が、この厳しい競争世界にありうるはずがないと思うかもしれませんが、たとえばオランダが実行しはじめてもう何年にもなるワークシェアリングはその一つの例であります。地球上で最も進歩した、崇高な精神をもっている人類が共存共栄といった理想へ向かって知恵を出せないはずはないのであります。

一方で競争は必要であります。しかしそれは健全な競争でなければなりません。競争というとき特に注意すべきことは、競争の目標や尺度が単純な数値的なものとなりがちなことであります。たとえば大きいことは良いことだとか、企業ではあらゆることを犠牲にして利益の追求のみに人々をかりたてる金もうけ主義といったことが行われ、質のよい物を作るとか、人々がいきいきと仕事をする環境といった数値に表れにくい価値が無視される傾向が強くなってきております。競争が何のために行われるのかといったことへの反省がなくなってしまうわけであります。

1998年ノーベル経済学賞を受けた、経済学者であり、かつ哲学者であるアマルティア・セン氏は、従来のような利益追求型の経済至上主義は間違いであって、もっと人間中心主義の経済政策をとるべきだと主張し、「人間の安全保障」という概念をかねてから提出しておりましたが、これは国連でも取りあげられ議論がなされています。この人間の安全保障という概念は、特に最近のコソボやアフガンの難民問題、アフリカの一部の国の状況を考えても、益々重要な概念となって来ています。各国、各地域の貧困、階級や所得格差などに基づく不平等がこういった問題の裏に存在するわけで、こういったことを無

くしてゆく政策を考え、努力してゆく必要があるわけですね。

競争ということの内容、すなわちこういった形の競争が奨励され、こういった競争は否定されるべきかは難しい問題であります。日本の戦後の初等中等教育では、競争に対立する概念である平等ということに絶対的な価値がおかれ、またこの平等という概念が適切に理解されず、チャンスの平等でなく、結果の平等ということが無批判的に受入れられてしまいました。その結果、能力のある生徒がその能力を十分にのばすことができず、押えられてしまうことになってしまいました。これは学力だけでなく、運動能力、その他においても同様で、全体が低いレベルに落ちてゆくということになり、無気力が教育界全体をおおうということになってしまいました。そして一方では、学校外での教育・補習などにおいて、大学入学試験を目ざして激烈な競争が行われて来たわけでもあります。

最近では大学の世界、学問の世界にも競争の概念が持ちこまれて来て、大学の教育・研究活動を外部から評価し、それに応じて予算配分をしようといったことが検討されています。適切な評価に基づく健全な競争はよいのですが、そうでない場合や過度の競争が多くの弊害をもたらすことは、例をひくまでもなく明らかなことであります。アルフィ・コーンは1986年の著書「競争社会をこえて」において競争の弊害をくわしく論じ、そのエネルギーを相互協力の方向に向けるべきことを論じております。これは単に教育の分野だけでなく、研究社会から一般社会、企業活動を含むあらゆる分野について適用される社会理論であると言えます。たとえば著者は、「健全な競争」という言葉のもつ矛盾をも鋭く指摘しています。我々はまさに競争という次元を越えたところに視線を定めるべきでありましょう。

学問研究は研究者の発想と意欲によって自由に行われるべきものであります。競争の時代だからといって、他の研究者の研究よりも進んでいて、他人よりも良い成果をあげるといった相対的な軸で考えるのではなく、学問の発展に対してどのように貢献しているかという絶対的な軸によって、研究を行って

ゆくのが本来の姿でありましょう。そうでなければ、新しい研究分野、学問分野を切り開くといったことはできません。

京都大学は、21世紀の地球社会が直面する困難な諸課題に対して真剣に取り組むべく、新しい研究科を幾つも作って来ましたが、こういったことは今述べました学問発展の絶対軸の考え方に基づくものであります。そして我々の視野は、単に人間社会だけでなく、他の生物、無生物を含む地球社会全体の調和ある共存にまで広げられ、京都大学における諸学の教育研究は常にそのことを念頭におき、それを実現すべく努力するところにあることを宣言しました。これは京都大学の基本理念および環境憲章に表されているものであります。

これから量の時代から質の時代への転換が行われてゆくでしょう。数値で測られる時代から、簡単には数値化できない物事の価値を重視する時代になってゆくでしょう。そして、グローバル社会の時代であるからこそ、逆にまた文化多元的世界というものの価値をより一層認識し、自分の持っている価値観だけで物事を裁断してはいけない時代となってきたのです。そこではお互いに相手の存在と価値を認め、共存するということしか解決の方法はないわけでもあります。

修士の学位を得て社会に出てゆく皆さんも、京都大学で学んだこと、京都大学が持っている考え方や精神を忘れることなく、それぞれが自分の道徳観、人生観を確立し、それを堅持して、これからの波乱万丈の時代を生きてゆくことが大切であります。皆さんにはそういった人間としての強さ、勇気が求められているのであります。それぞれの人がこうして努力してゆくことによって、日本の社会が個人の尊厳をさらに高めるとともに、全ての人にとって住みよい社会を実現してゆくということにつながってゆくでしょうし、またその努力によって世界全体の調和ある共存という理想に少しでも近づいてゆくことになると思います。

努力することによって将来に希望をもつという信念を持って、社会に出て行ってくださることを希望し、私のご挨拶といたします。

博士学位授与式における総長のことば

平成14年 3月25日

総長 長 尾 真

今日ここに博士の学位を得られた皆さん、まことに
おめでとうございます。ご列席の各研究科長をはじめ、
京都大学のすべての教官と共に、皆さんの学位取得
に対して心から祝福致します。今回は課程博士454名、
論文博士84名、合計538名でしたが、本年度一年間
を通じますと課程博士626名、論文博士261名、合
計887名となります。京都大学は日本の代表的な大
学院重点化大学、研究中心大学であります。このよ
うに毎年大勢の博士授与者を出し、しかも年々その
数が増加しているということは、まことに喜ばしい
ことであります。

皆さんの研究は、それぞれの学問研究分野の流れ
の中に明確な刻印を打ち、その学問、研究分野の発
展にはっきりした寄与をしたものであると存じます。
それは、課題の発見と設定、その課題の解決、その
ための新しい方法論の確立など、どの部分をとって
も皆さんの創意工夫、独創性の結果であり、創造の
苦しみを味わったに相違ありません。

その苦しみが大きければ大きいほど、困難を突破
したときの喜びも大きいのであり、今日はその喜び
をかみしめておられることと存じます。研究におけ
るこの喜びは何物にも代えがたいものであり、この
喜びこそ研究者のもつ特権であると言えることが
できるでしょう。こうして皆さんは、それぞれの困
難な壁を突き破って新しい世界を切り開いたからこそ、
京都大学博士という名誉ある称号を得ることができ、
はっきりとした自信を持って社会に出てゆくことが
できるのであります。

だからといって自信過剰になってはいけません。
今日博士の称号を受けたほとんどの方は課程博士で
あり、これまでずっと大学という特別な環境の中で
過ごしてきたのであります。これからいよいよ社会
に出てゆくわけですが、企業社会の文化や、人間関
係は大学のものとは全く違います。学問や論理がす
んなりと通り、受け入れられるには社会はあまりに
も複雑すぎます。皆さんが大学院の研究で達成した
こと、あるいは大学で得た学問・知識を現実の世界
に適用するためには、大変な努力が必要であるとい

う覚悟をすることが必要であります。

アメリカの19世紀の詩人エミリ・ディキンソンは
面白い詩を残しています。

真実をそっくり語りなさい。しかし斜めに語り
なさい -

成功はまわり道にあります。

私たちのひ弱な喜びには明るすぎます

真実のもつ至高の驚きは。

丁寧に説明すると

子供たちも稲光りが怖くなくなるように

真実はゆっくりと輝くのがよいのです

さもないと誰もかも目がつぶれてしまいます。

エミリ・ディキンソン、亀井俊介訳；

岩波文庫 ディキンソン詩集159頁

ほんとうに、新しい発見、新しい概念といったも
のは、すぐには社会に理解されません。そこで焦つ
たり怒ったりせず、時間をかけて辛抱強く説明し、
またそれをわかりやすい形に敷衍する努力が必要で
あります。これは研究成果だけについて言えること
ではありません。企業内で新しいプロジェクトを立
ち上げようとする時なども同じであります。上司に
そのプロジェクトの意義や重要性を説明しても、最
初からそれを了承してくれる上司はほとんどありま
せん。内容が理解できても、こういった場合にはど
うだ、ああいった場合には社会は受け入れないの
ではないかといった具合に、いろんな異論を出し、ま
るでその提案をつぶそうとしているのではないかと
さえ思うことがよくあるのです。しかしそういった
場合にも落胆せず、絶対にやるべきプロジェクトで
あれば、時間をかけて説明し、相手を理解させる努
力をするべきであります。

上司はプロジェクトの内容と共に、必ずプロジェ
クトを成功に導くという提案者の持つ熱意と自信と
気力、その注意深さなど、要するに提案者の人間を

見ていることが多いのです。誰でもできるようなプロジェクトでは意味がなく、成功させるという熱意と気迫を持った者だけが実現できるプロジェクトだからこそ、やる価値があるというわけであります。

社会に出れば、皆さんの持つ知識や研究能力が試されるだけではありません。皆さんの人間が試され、試練を受けるのであります。英語の有名なことわざ、

Adversity makes a man wise.

は、日本でも

艱難汝を玉にす

と訳され、よく知られています。

近年のイタリアの詩人ジュゼッペ・ウンガレッティの詩にも

これがセーヌ河
あの混濁のなかで
おれは掻きまわされ
自分を知った

ジュゼッペ・ウンガレッティ、須賀敦子訳；
青土社 イタリアの詩人たち43頁

というのがあります。パリへ行って苦労し、自分を発見したことを述べたものでありましょう。いずれ

も困難を正面から受け止め、それを乗り越える努力をすることが大切であることを意味しており、これを逃れようとしたり、拒否したりする人は成長することができません。

皆さんの京都大学博士取得と社会への門出をお祝いして、最後にロングフェローの人生の讃歌の一節をお送りいたします。

楽しみも、悲しみも、
吾らの定められた行手でなく道でもない、
明日ごとに今日よりも進んだ吾らになるよう
行動することこそ、吾らの目的だ、道だ。

.....

.....

されば起って活動しようではないか、
いかなる運命にもむかう意気をもって。
絶えず成し遂げつつ、絶えず追い求めつつ、
労働して待つあることを学ぼうではないか。

ロングフェロー、大和資雄訳；
平凡社 世界の名詩260頁

大学の動き

平成13年度卒業式

3月26日(火)午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各部局長等の出席のもとに平成13年度卒業式が挙行された。京都大学交響楽団による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の奏楽、京都大学合唱団による学歌斉唱の後、長尾 真総長から、各学部代表に学位記が授与された。

続いて、総長の式辞があり、最後に「蛍の光」を全員が合唱して、午前10時45分に終了した。

本年度の新学士は、総合人間学部133人、文学部227人、教育学部56人、法学部412人、経済学部241人、理学部312人、医学部107人、薬学部84人、工学部960人、農学部302人の計2,834人であった。

平成13年度修士学位授与式

3月25日(月)午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ各研究科長等の出席のもとに平成13年度修士学位授与式が挙行された。

長尾 真総長から各研究科代表に、学位記が授与された後、総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

本年度の修士課程修了者は、文学研究科98人、教育学研究科39人、法学研究科64人、経済学研究科63人、理学研究科211人、医学研究科22人、薬学研究科78人、工学研究科580人、農学研究科279人、人間・環境学研究科125人、エネルギー科学研究科108人、アジア・アフリカ地域研究研究科3人、情報学研究

科166人、生命科学研究科82人の計1,918人であった。



博士学位授与式

3月25日(月)午後1時から、総合体育館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長等関係者出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記が手渡された後、総長の式辞があり、午後2時20分終了した。

各研究科別の内訳は、右のとおりである。

研究科	課程博士	論文博士	合計
文学研究科	24人	5人	29人
教育学研究科	3	1	4
法学研究科	1	4	5
経済学研究科	10	1	11
理学研究科	132	7	139
医学研究科	81	7	88
薬学研究科	26	6	32
工学研究科	73	35	108
農学研究科	61	10	71
人間・環境学研究科	24	-	24
エネルギー科学研究科	11	2	13
情報学研究科	8	6	14
計	454	84	538

医療技術短期大学の動き

平成13年度医療技術短期大学部 卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月18日(月)午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の出席のもとに、卒業式・修了式を挙行了した。

式は卒業証書・修了証書授与に引き続き、学長式辞、来賓祝辞があり、午前10時40分終了した。

卒業生は、看護学科63人、衛生技術学科32人、理学療法学科20人、作業療法学科21人で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20人の計156人であった。

